

て、中国軍と交代で警備につきましたが、服装もキチツとしていましたし、日本人に敬意を表していました。

私たちの中隊も、一部はビルマへ行くなどして帰ってきたのは七〇人ぐらいで、多くの戦友が戦没しました。

昭和二十一年四月、浦賀についたがコレラ船で、一、二か月留め置かれた者もいた。

私の軍隊生活の苦労の実態

鳥取県 小 椋 武 光

私は大東亜戦争の真最中の昭和十八年一月に鳥取第四十七部隊に歩兵第二百一連隊として入隊、三か月後仮検閲を受けた。三月には満州に行くことが分かっていた。

父母や妻は何回か日曜日に、不自由な砂糖で私の好きな餡餅などを持って面会に来てくれた。ある日面会所にいると、上官が巡察に来た時、私が敬礼動作を機敏にやると、父母たちは早くも兵隊らしくなったことに驚いていた。

三月二十四日、渡満することとなり、鳥取駅で見送りに来た父母、妻、親戚の人に最後の別れをして、多くの人々の歓呼の聲に送られて乗車、夜には下関港を出航、日本海の荒波に初めて海を渡る船酔いに苦しんだ。

夜中に釜山港に上陸、輸送列車で北進、三月二十八日鮮満国境の黄緑江を渡って満州国に入り、三月三十日三江省鶴立県興山歩兵第二百一連隊に編入された。

七月十日、第一期の検閲が済み、陸軍一等兵に進級し心を新たにした。

その間、血の出るような訓練とソ満国境警備であるが、苦労したのは厳しい毎日の訓練でした。特に起床、洗面、点呼で人より早く並ぶことと軍馬の管理でした。我が中隊は機関銃中隊で軍馬も飼育しており、朝の点呼が済むとすぐ厩に早がけ、決められている自分の馬の寝わらを外に出して糞を捨て、大切な馬の脚をよく洗って保革油を塗って飼付けをやることである。

飼付けが終わって兵舎に帰ると週番上等兵が炊事場に飯上げに行く。早く帰った者から飯上げに行つて各班に分けたのを持ち帰る。配膳ご飯は大豆入りや高りゃん入

りであった。早く食事が終わったものが班長の膳を下げに行く。私は三度に一度は下げに行った。早く班長に顔を知ってもらうためだ。

夕方になれば軍靴の手入れだ。これも班長、古年兵分と一人で三足ぐらい磨いた。夜間の不寝番には三日に一度は立たされた。一日中休む暇とてない。休めるのは日曜日であるが、これも班長、古年兵の下着や私のものを洗濯して盗難防止のため乾くまで番をする。しかも歩兵操典を勉強しながらである。

また、いろいろと演習や訓練が行われる。夏期演習は炎天下の行軍で、足は豆だらけで、一週間ぐらい重い重火器の搬送も大変であった。ダ号演習といって靴に綿を巻いたり馬には藁靴を履かせ、騒音防止の夜間行軍する隠密訓練である。夜明け前に地中に下をやや広くして寝ることの出来るように穴を掘り、穴のまわりは擬装網と草木で覆う。日暮れを待ってまた出発する。

冬季演習は防寒帽も靴も石のようにコチコチに凍り付いて行軍中、鼻にツララが下がる。嘘のような話である。スキー訓練にも参加したが、白系ロシア人のいる黄道河

支という所で楽しかった思い出が残る。

対戦車訓練は、蛸つぼより竹竿の先端に黄色火薬を取付け、それを戦車の履帯に差し出して爆破する方法で、誠に危険な作業であった。

一期の検閲が済んでから、初年兵はいろいろの修業があり、私はガス兵の修業にでた。部隊が敵のガス攻撃に遭遇した場合、ガス排除する任務で、訓練生にガスを馴れさせるため五〇センチぐらいの壕にテントを張り催涙ガスを炊いて一人づつその穴を通過させ、必ず一、二回は呼吸するので死ぬ思いをする。イペリット、ハイサイトといった体が腐蝕するガス排除訓練は、全身ゴムの被服に防毒面を装着（完全防具）して大草原を走り回った。その苦しみは、やった者以外分らないだろう。

昭和十九年一月、上等兵に進級、ようやく後輩の初年兵が来た。二年兵になった喜びも束の間、十日ほど経って我々に転属命令が来て、来たばかりの初年兵と数人の教育係を残して中隊長以下、北滿を後にすることとなった。

防寒服を置いて寒さに耐えながら貨物列車に乗り、三

二月十九日山海関を通過、北支へ向かった。途中、濟南で北支部隊と混成、数日かかって上海に到着、楓部隊第二百十一連隊となった。中支では毎日上陸用船艇で敵前上陸訓練、三月の寒中に首だけ出して渡河訓練もやった。

初年兵がいないので、再び初年兵に後戻りである。数名でモールの訓練も受けた。やがてウースン港に大きな船が来て積荷を始め、四月十七日乗船した。船は七〇〇〇屯級の貨物船を改造した輸送船七隻で、海軍の護衛艦隊数隻に守られ夜中に出航した。バシー海峽南下中、夜中に輸送船二隻が轟沈、夜の海は火の海と化しどうすることも出来なかった。

四月二十七日、マニラ港に寄港、石炭を補給して五月一日出発。今度はセレベス島沖で白昼またも一隻が魚雷にやられ、私は二番目の船の甲板から、目前で水柱を立てて轟沈していく様を見た。今度はこの船の番だと思つて救命胴衣の紐を締め直した。

メナドに待避した後、幸いハルマヘラ島に上陸することが出来た。休む間もなく我が中隊は、その日のうちにモロタイ島へと進出した。五月十一日であった。約三か

月ワヤブラで陣地構築に明け暮れ、ようやく完成して海上警備の段階となったら、本部命令でハルマヘラ本島に引き揚げることになった。はじめはワシヤ部落に陣地構築を陣取ってはじめてた。機関銃は海岸の前方の良く見える場所に穴を掘り、その上に椰子の木を縦横三段に並べ、その上に小山のように土を盛りつた陣地で、三か月を要した。

そのころまでは「カウ」という所に飛行場があり、友軍機が我々の上空を警備し、近く決戦機「零戦」が来るというデマも飛んでいた。

ある日、椰子の林の上空に数十機の編隊が飛来し、友軍機ではと、良く見れば星のマークの米軍機だった。続いて米艦隊の艦砲射撃が始まり、我が軍の足を止めながらモロタイ島に上陸して、瞬く間に飛行基地を作り上げてしまった。

米軍は毎日ハルマヘラ本島の爆撃を始め、日本軍のいそうな所は満遍なく攻撃し、爆弾を惜しみなく投下した。我が中隊も部落から山中に移動した二十年二月兵長に昇格、身の引き締まる思いだった。

我が軍も切り込み作戦に出て、中隊の三分の一ぐらいはこの切り込みに出撃した。命令の来た兵士は、手榴弾三発、小銃弾一〇〇発、乾パン三日分と聞いていた。後は自活せよとのことで死んで来いの宣告に等しいものである。食料、兵機の補給や、次々行う予定もなく、意のようにならなかつたようである。

ある日、我が軍の砲撃にやられたのであろう、米軍の双発機（ロッキード）が中隊近くの山畑に墜落、一人の兵士が死んでいた。中隊長とともに点検、死体を椰子林に葬ってやった。また、我が軍の野砲弾が山積みしてある資材倉庫が爆破され、弾薬に引火して一日中炸裂した。また現地人部落に空襲があり、トペロの町が全焼した。戦いはだんだん熾烈を極め、米軍の上陸も何時来るか分からない状況となり、我々は一層警戒を厳重にした。

陣地構築中、椰子林をしゃへいしながら飛来してきたグラマンに爆弾を落とされ、土を被ったが一命は助かったこともあり、またロッキードに狙撃も受けた。空襲に備え各所に蛸つばを掘っており、いざ空襲という時に飛

び込めるようになっていた。こうした時、郷里の父母や妻のことを思い出し、私の命も今日で終わりだろうか等、度々思い浮かぶことだった。

八月二十日ころと思うが、米軍機がビラを撤き終戦を知った。現地人の持参した終戦のビラには立派な日本語で、大本営より停戦の発表をされた旨、記してあった記憶がある。やがて米軍の援助を受けて切込隊の捜索の一員に加わって、モロタイ島の山谷を一か月間かかって五人ばかりの友軍兵士を捜し出した。捜索中、木の根っこにうづくまった白骨や川の淵に頭蓋骨がよどんでいた。十日ほど前に死んだ兵の姿も見たが、いずれも目をそむけざるを得ない状態であった。

迎えの船の来ないまま、十か月南方の孤島で芋造りなどの自活の毎日だった。

昭和二十一年六月、ようやく迎えの船に乗船し帰ることになったが、船中でも大時化に出会って転覆寸前で助かり九死に一生を得て、田辺港に上陸することが出来た。